

消えても生き続けるもの

西野 歩

専門学校 社会医学技術学院

本号が刊行され会員の手元に届くのは、ちょうど沖縄で開催される第14回作業科学セミナー開催の頃となる。沖縄独自のセミナーにしよう工夫を凝らしていると聞き、参加することを大変楽しみにしている。

父が沖縄県の宮古島に移住して7年となり、15回を優に超える訪問を通して宮古島に大きな魅力を感じている。土着的で、閉鎖的で、それでいて原初のエネルギーと愛情にあふれ、何をも許すおおらかさにとてつもない魅力を感じる。そして、たくさんの神様と共に生きるというのは、都会に生まれた私にはない作業で、その魅力は尽きることがない。

民族学者の谷川健一氏が沖縄県の宮古島を語っている記事を読んだ。宮古島の神話に魅了され、原初への世界を探索してきたとあった。

古くからの祭りであるウヤガンがほぼ消滅したようであり、神に仕える女性ツカサになる女性もいなくなりつつある。でも、たとえ現象が消えてもその中のエートス、性格のようなものは生き続けるのだと思いますと述べている（平成22年10月19日、朝日新聞）。

「消えても生き続ける」という一文に感動した。作業もまた消えても生き続けるものだと切に思ったからだ。

私たちの作業は生涯を通して変化し続ける。年をとって、病気になって、家族が増えたり減ったりして、または居場所が変わってできなくなる作業はたくさんある。でも、一人一人の中に、しなくなった、できなくなった作業は生き続けている。

私は子供のころ滑り台を滑り落ちるのが好きだった。今はスキーへと形を変えて楽しんでいる。将来はスキーをできなくなると思う。でもきっと、胸がドキドキし、風が気持ちよく、体を感じる重力を思い出し、年をとったら若い人に「昔は、滑り台で... スキーで...」と話し自慢するかもしれない。公園で子どもが滑り台を滑る様子に、微笑み、楽しい気持ちになるかもしれない。

最近、療養病棟に入院している「機嫌が悪く、自分から何もしない認知症の患者さん」と聞いた男性と五目並べをした。たくさん碁盤に囲碁を並べ、ついに押し出されて私が負けた。押し出しで五目を並べるなんてずるいと言う私に、ニヤリと、してやったりという顔をする患者さんは、認知症というよりウィットのきいたおじいさんだった。打っている最中の考えている様子は、英知を集めた顔になっていた。五目並べは長らく消えていたけれども、この男性の中に生き続けていたのだ、作業のおかげでこの方の本来の顔を見られたな、作業ってすごいなと思った。

また、「消えても生き続ける」の一文には *Occupation by Design* (Pierce,2003) の生産のページにある潮干狩りの挿絵を思い起こさせた。

私たちの祖先が食べるためにしていた潮干狩りは、今も海とバケツと熊手があれば私たちを熱中させる。はるか昔に潮干狩りをしていた人は消滅しているけれども、潮干狩りは生きている。

焚き火をするとこの火を消すものか！と張り切ってしまう。キャンプで炎を見るとなぜだか肉を焼きたくなる。太鼓の音を聞けば一緒に太鼓を叩きたくなり、盆踊りの音楽には踊りたくなる。

日常にはない作業は、日頃忘れられているが、私たちの中に脈々と生きている。

宮古島から家に帰ってしばらくすると、また宮古島のウタキに行き、心静かに過ごしたくなる。私の祖先がしていたように、神を尊び、自然を尊敬する、そんな作業が脈々と私の中にも残っている。人と作業が消えてもエートス、その性格のようなものが生き続けるのではないかと思う。

この作業の魅力を、もっと探究したい、もっとたくさんの人に知ってもらいたい、もっとこの恩恵を受け取ってほしい。

消えても生き続ける作業、その力を自分の人生そして周囲の人の人生に役立てませんか。